

白川改修・立野ダム建設促進期成会
会長 熊本市長 幸山政史 様
菊陽町長 後藤三雄 様
大津町長 家入 勲 様
南阿蘇村長 長野敏也 様

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島 康
立野ダムによらない白川の治水を考える熊本市議の会 代表 田上辰也
ダムによらない治水・利水を考える県議の会 代表 平野みどり
代表連絡先 熊本市西区島崎4丁目5-13 中島康
電話 090-2505-3880 FAX 096-354-2966

立野ダム本体工事の早期着工要望への抗議文

白川流域4市町村（熊本市、菊陽町、大津町、南阿蘇村）でつくる「白川改修・立野ダム建設促進期成会」が5月20日に総会を開き、立野ダムの本体工事の早期着工と事業の推進を強く要望する方針を決めたことに対し、私たちは6月4日に抗議文を提出しました。

ところが、新聞報道によりますと貴職は7月30日、国土交通省に対し立野ダム本体工事の早期着工を求める要望書を提出されました。

白川中流域（大津町と菊陽町）では河川整備計画が策定されておらず、白川の川幅を拓げるなどの改修計画は全く策定されていません。2012年の九州北部豪雨の様な降雨があれば再びあふれてしまうことは明らかであり、私達も国土交通省や熊本県に対し白川中流域の河川整備計画策定を何度も要望してきたところです。貴職が同要望書の中で、激甚災害対策特別緊急事業区間の事業推進や未改修の中流域の新規事業化など、白川改修の促進を要望されたことは高く評価します。

一方、立野ダムの総事業費は、当初予算の2倍以上の917億円に膨れ上がり、熊本県の負担額は917億円の3割、275億円（県民一人あたり約1万5000円）にもなります。公共事業は本来、住民の税金により、住民のために行われるべきものです。ところが、白川流域に住むほとんどの人たちは、「立野ダムはどんなダムで、何を目的につくられるのか、どこにできるのか聞いていない」という実情です。にもかかわらず、事業主体である国土交通省は、住民が要望している立野ダムの説明会を開催しようとしません。「ダムによらない治水・利水を考える県議の会」が国土交通省に説明を求めた集会さえも、同省は出席を拒否しました。さらには、住民団体が繰り返し提出した立野ダムに関する質問状にさえ真摯に回答しようせず、「当省のホームページを見るように」との見解を繰り返すばかりです。国は住民に対し、立野ダムについての説明責任を果たしているとはとても言えません。

立野ダム事業が多くの問題を抱えている点は、これまで何度も提出しました要望書等で述べたとおりです。立野ダム事業についての説明責任が全く果たされていない状況の中、立野ダム本体工事の早期着工を要望されたことに強く抗議するとともに、下記2点について国土交通省に要請することを再度、強く求めます。

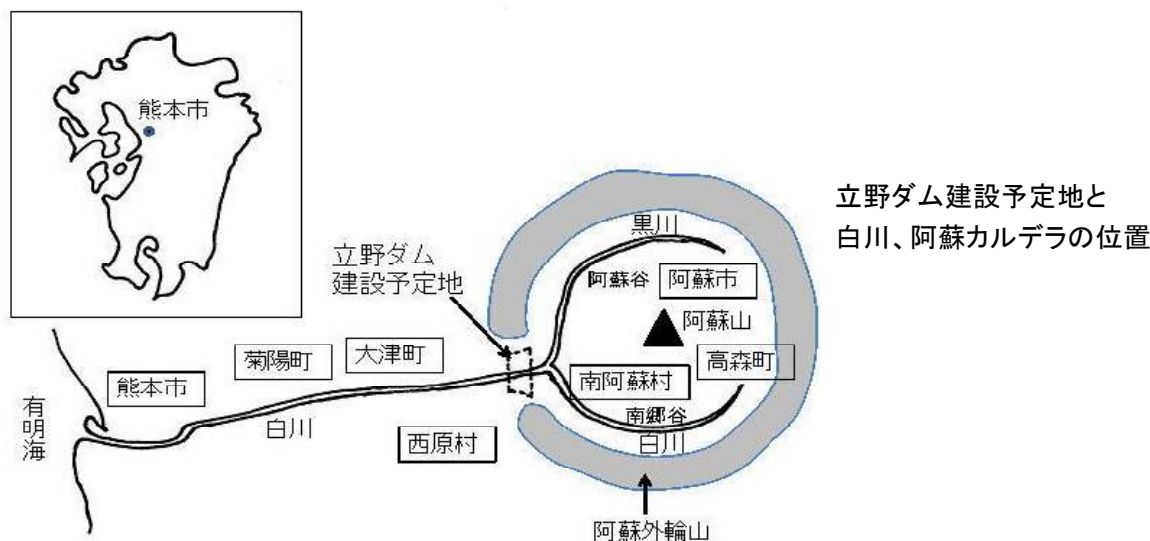
記

1. 白川流域の市町村ごと、熊本市にあっては白川沿いの中学校区ごとに立野ダム事業に関する説明会を開催することを、国土交通省に要請すること。その際、住民の質問については真摯に回答し、住民の意見を十分に聞くこと。
2. 上記説明会が開催され、国が立野ダム事業についての説明責任を果たすまでは、立野ダムの転流工事（仮排水路トンネル工事）に着工しないように、国土交通省に要請すること。

以上

【参考資料】立野ダム問題について

立野ダムは阿蘇外輪山の唯一の切れ目である立野火口瀬に国土交通省が計画した、高さ 90 mの洪水調節専用の穴あきダムです。1983 年に事業が開始され、取り付け道路などの工事は進みましたが、ダム本体工事には着手されていません。

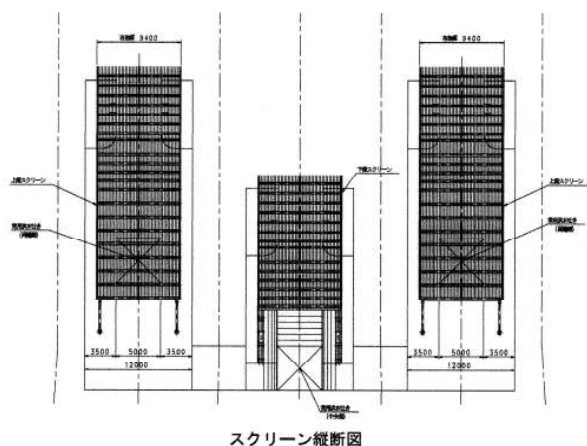


●洪水時、立野ダムは機能しません

球磨川の荒瀬ダムは、洪水時に流木などを引っかかりにくくするために、建設工事中に水門（ゲート）の間隔を当初の 10m から 15m に広げています。洪水調節専用の「穴あきダム」である立野ダムにはゲートがない代わりに、ダムの下部に一辺が 5 m の 3 つの「穴」があいています。洪水時、この穴が流木等でふさがると、立野ダムはたちまち洪水調節不能の危険な状態となります。

国土交通省は流木対策として、立野ダムの穴の上流側をスクリーンで覆うとしています。しかし、大量の流木がひっきりなしに流れる洪水時の白川の状況を考えると、そのようなものはたちまち流木等でふさがってしまうと容易に想像できます。

ところが国土交通省は、「スクリーンにはりついた流木は、ダムの水位が上昇すると浮きあがる」と主張しています。流木を穴が吸い込む力は、流木の浮力よりもはるかに大きいのは明らかです。洪水時、立野ダムは機能しないどころか、大きな災害源となります。



立野ダムの3つの穴(5m×5m)の上流側を覆うスクリーン(国土交通省資料より)



●立野ダムの地質の問題

なぜ立野峡谷でカルデラ（外輪山）が切れて白川となったかということを考えると、外輪山の中で最も地盤が弱かったからだと考えられます。そのようなカルデラの切れ目にダムをつくるのは、専門家でなくとも危険を感じます。

立野ダム建設予定地である立野峡谷一帯には、東西方向の断層や活断層が数多く集中しており、ダム予定地左岸側には、北向山断層と呼ばれる落差 200m もの北落ちの活断層があります。

ダム予定地右岸は、阿蘇カルデラ内の火山から流下してきた立野溶岩で、冷却によって生じた角材状の割れ目が多く見られます。特に、ダム本体予定地の右岸側は、柱状節理と板状節理の溶岩が何層にも堆積し、不連続面が6つ以上目視できます。

一方、ダム本体予定地左岸は、右岸側とは全く違う先阿蘇火山岩類による地盤です。今後、阿蘇の火山活動が活発になり、ダムの右岸と左岸で地盤が全く違う動きをすることも十分考えられます。そのような場合、ダム本体と周りの地盤の間にすき間が生じ、最悪の場合、ダムの崩壊へとつながります。



ダム本体予定地右岸側は柱状節理と板状節理が交互に堆積している 2014年4月19日撮影

●立野ダムの堆砂の問題

国土交通省は「立野ダムでは、洪水時には一時的にダムに土砂が堆積（最大で約 60 万 m³）しますが、その後のダムの水位の低下とともに堆積した土砂は下流へと流れるため、ダムが土砂で埋まり、洪水調節機能を発揮しなくなるようなことはありません」と主張しています。

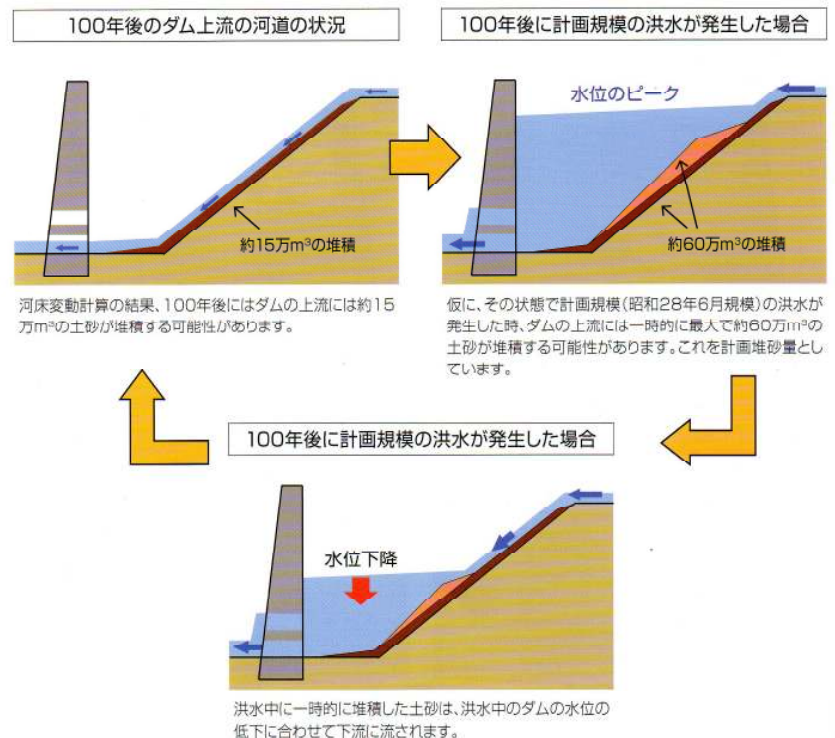
しかし、洪水時の白川の水は多くの火山灰（ヨナ）とともに、多量の岩石や流木等を含みます。阿蘇カルデラ内の岩石や流木、土砂、火山灰などが全て立野ダム予定地に集中します。それらが、立野ダムの下部に設置される3つの穴（高さ5 m×幅5 m）を通り下流へ流れていくことは、どう考えても不可能です。

堆砂量算定の考え方

しかもダムの穴の上流側は、スクリーンで覆われているのです。

2012年7月洪水後、大津町から熊本市にかけての白川の河床には、大量の岩石や土砂、火山灰が堆積しました。立野ダムが完成していれば、それらは全てダム上流部にたまるのは明らかです。

昭和28年の6・26水害では、立野ダムの総貯水量の約3倍の2847万 m³もの土砂や火山灰が熊本市と白川水系沿岸の水田などに堆積しています（熊本県災害救助隊本部調べ 熊本日日新聞 1953年7月6日）。同洪水が起きても立野ダムには60万 m³の土砂しかたまらないという国土交通省の説明は、全く科学的ではありません。



国土交通省「立野ダム事業概要」より